

【 会員投稿 】

「団子盗み」

大槻伸次

今年(昨年)、我が家では久しぶりに十五夜と十三夜に月見飾りをし、秋の夜の風情を楽しんだ。この日天候に恵まれ、夕暮れ時東の空に大きな満月、西の空に沈み行く真っ赤な太陽とが同じ大きさで見られた。

十五夜の月は「中秋の名月」といわれ、澄み切った秋の夜空にくっきりと描き出される。遠い昔、月のウサギの餅つき姿の謂れに童心を神秘の世界に誘ったものである。

名月を鑑賞する習慣は、中国の唐の時代からあったようで瓜や菓物を並べて供え人々は月餅を食べたという。この習慣が日本に伝わり、団子やススキ(尾花=カヤ、花言葉は活力、萱葺き屋根の材料)を添えてお月見をするようになったといわれている。また、仏教発祥の地であるインドには月に関して次のような謂れがある。昔、森で如来が菩薩行に励んでいる時、キツネとエン(猿)とウサギがそばに仕えていた。ある朝、天帝釈が三獣の心を試そうと、老夫に身を変え、如来の食物を探そう頼むと、キツネは鯉、エンは果物を捧げたが、ウサギは何も持ち帰らず「私は何も取れない愚か者ゆえこの身を」と叫ぶや、燃え盛る焚き火に飛びこんでしまったという。感嘆した天帝釈はウサギを永遠の月世界へ送り、人々は哀れんで卒塔婆を建て、いつのまにか月の中で餅をつく姿を幻想するようになったと云われている。

子どもの頃、生家では十五夜や十三夜の晩は母が決まって炭酸饅頭を作ってくれた。そして、月見の飾りをするのは自分たち子どもの仕事だった。

野原からススキを採って、空き瓶(だいたい一升瓶だった)を探して、供え物と一緒に座卓に飾った。ススキは、十五夜では略して五本、十三夜では三本飾った。十五夜と十三夜は対で、片一方だけ飾るのは片見月といって縁起が悪いと嫌われた。

供え物は、実りの秋を反映して十五夜の頃はさつま芋、里芋、十三夜の頃は豆や栗などその家庭で収穫したものを供えた。それ故、十五夜は芋名月、十三夜は豆(栗)名月ともいわれたようだ。

お月見の日、我々子ども達には別の楽しみがあった。この晩だけはよそ様の家の月見飾りのお供え物を戴いてよい(下げる)という風習(団子盗み)があった。私も、よそ様の家に行ってお供え物を下げた思い出がある。ところがどの家でも高価な果物などの供えはなく、柿や栗、さつま芋、里芋、大根など自家にあるものだった。我が家は農家で自家に有るものは下げる必要はなかったが、その夜は先輩達と遊べるのが楽しくて兄と仲間に入れてもらった。両親から、下げてくる時は一声かけ黙って持ってこないでと厳しく注意された。

ところが、近所のiさん宅は何時もお供え物を下げさせてもらえなかった。というのは、お供え物を飾る座卓が縁側の奥の座敷のほうにしつらえあり、外からは絶対届かなかった。そこで、餓鬼大将以下先輩達は何度行っても供え物を下げさせてもらえないと腹を立てた。そんなら我々が供えてやろうじゃないかと騒ぎ出した。

何を備えようかと皆で思案の結果、漬物石のような大きな石ころを供えようということになった。石ころは県道端から失敬し、我々子分がヨイショヨイショと運んだ。

<次号に続く>



【 会員投稿 】

「団子盗み」 (2)

大槻伸次

ところがそれだけでは面白くないなということになり、また皆で相談が始まった。そうだ、交代で小便をして石を清めようということになった。

小便は、縁側の紙貼り障子に穴を開け、代わる代わる放尿した。さいわい？、iさん宅は、お供え物が置いてある廊下の手前に上がり降りが楽なように踏み石が置いてあったので、背の低い子どもでも充分届いた。

放尿の後、餓鬼大将がウンコの調達を提案したが誰も催さないというので、堆肥場に捨ててあった腐ったかぼちゃを運んで供えた。

その十五夜の晩は、何事もなかったようにまんまるい満月がこうこうと輝いていた。そのあと悪戯がすぐにばれるなんて誰も想像もしなかったので、大胆にも悪餓鬼達はiさん宅の広い屋敷林で「かくれんぼ」や「追いかっこ」をして遊んだ。

ところがいつしか遊びに夢中になり先ほどの悪戯はすっかり忘れていた。

すると突然、木立に隠れていた悪餓鬼が、オーイ大雨が降ってきたみたいだゾーと大きな声で叫んだのが聞こえた。すると別の餓鬼が、なんだかすごくクセゾーと大騒ぎを始めた。みなわれに返って考えてみたらその理由は直ぐにわかった。というのは先ほどした悪戯の洗いをぶっ掛けられたのである。

その主人は、悪戯にも程があるとすごく怒っていたらしいが、何時も家に閉じこもっている人だったので、その晩は大騒ぎにはならなかった。

ところが、おばあさんは激怒し、あくる日悪戯した子供達の犯人捜しを始めたと耳にした。それから、餓鬼大将から知らせがあり皆しらばくれるよう厳命が下った。やがて自分も兄もおばあさんから尋ねられることになったが、全く知らないね！と堂々と嘘をついた。

結局、誰が犯人か表向きバレることなくうやむやになった。しかし、誰が悪戯の犯人かの検討ぐらいはつけていただろうと思った。そして悪戯もいつしか忘れられていったが、悪いことをしたとみな後悔していた。その後、餓鬼大将以下悪戯にかかわった子ども達の誰一人としてその話題を持ち出すものはいなかった。

俳人の坪内稔典さんの「季語集」(岩波新書)には「団子盗み」という季語がある。お月見の夜、子供らが縁側に供えられた団子を竿で盗むという風習で、盗んだ子は丈夫になり、盗まれた家は縁起がよいとされたという。「団子盗み」は、戦後は教育上よくないことだと各地で悪習とされ禁止されてしまった。

しかし、坪内さんは「子供の冒険心を刺激するユーモアに富んだ行事」だったとそれを惜しんでいる。

我が家では久しぶりの月見飾りをし、供えた饅頭を早々に下げ、妻とお茶を飲みながらいただいた。そして幼い日の「団子盗み」の日のほろ苦い思い出に話題が及んだ。しばらくして月見飾りをした縁側のカーテンを閉めに行くと、満月はアノ頃と同じようにこうこうと輝き人々の生活を見守ってくれていた。思わず満月に向かって手を合わせてしまった。(終)

祝
長
寿

菱 寿

喜 寿

対比地誠二郎 様	太田市中根町	85歳(1929/04/14)
永瀬 潜 様	太田市粕川町	77歳(1937/04/01)
上原 正義 様	太田市内ヶ島町	77歳(1937/04/16)
田部井 秀夫 様	太田市尾島町	77歳(1937/04/18)
小此木 光二 様	太田市新田木崎町	77歳(1937/04/25)